

■目次 ————— CONTENTS ■

2008年(第7回)年次大会を振り返って	1
プレ・カンファレンス・ワークショップ	
「テキストマイニングによる社会文化研究へのアプローチ」	2
基調講演 鳥飼久美子氏「多文化時代における言語とコミュニケーション」	3
パネルディスカッション「日系ブラジル人との共生を探る」	4
ランチョンセミナー「多文化共生コンセプトとトランスカルチュラルリティ」	5
オープンフォーラム「多文化関係学の可能性を考える」	6
石井奨励賞(学生会員対象)について	7
地区研究会報告 北海道・東北…7 関東…9 関西・中部…10 中国・四国…12 九州…13	
地区研究会案内	15
近著紹介	17
2008年度第1回・第2回理事会議事録	20
事務局より 学会利用の手引き	23
お知らせ 学会誌編集委員会より/Kathy Charmaz氏 講演のご案内	24
編集部より	24

第7回年次大会特集

多文化関係学の構築をめざして

——マイクロとマクロからグローバル社会を考える——

●大会を振り返って

第7回年次大会は明星大学日野キャンパスを会場として、去る2008年10月17日(金)、18日(土)、19日(日)に開催されました。大会のテーマは、学会の基礎理念を確認するねらいから「多文化関係学の構築をめざして—マイクロとマクロからグローバル社会を考える—」と設定しました。プログラムの基盤となるのは研究発表です。多くの会員がご参加くださって大会の開催が可能になりました。また、企画と実行は、大会委員の皆さんのおかげで実現できました。とくに、大会副委員長であった、河野康成さんと手塚千鶴子さんは長時間の労力を払ってくださり、大会運営にかかわる不可欠なご指導をいただきました。

■第7回年次大会特集
多文化関係学の構築をめざして
—ミクロとマクロからグローバル社会を考える—

10月17日(金)には、プレ・カンファレンス・ワークショップが開かれました。大会委員の抱井久子さん、河野康成さん、立命館大学の稲葉光行先生が企画指導してくださいました。ここでは質的研究の方法の一つであるテキストマイニングを参加者のコンピューターを使用しながら、紹介してくださいました。

大会初日の基調講演では立教大学の鳥飼久美子先生が、2言語使用の理論をなぞりながら非常にわかりやすく日本の状況を説明されました。グローバル社会を考える過程において、言語の存在は大きいと言えます。また、パネルディスカッションでは、井上ミサさんのご尽力によって多様なパネリストをお呼びすることができました。日系ブラジル人を巡る多文化共生の問題と可能性が具体的に示されたと思います。ブラジル移民100周年記念に伴い、パネルディスカッションは大会に大きな時事性を与えました。さらに夕方からのアトラクションでは、ピアノの伴奏とともに、クラシックのアリアが披露され、その後、懇親会が大学の食堂で行われました。

最終日には、手塚千鶴子さんと灘光洋子さんが、ランチョンセミナーとオープンフォーラムを企画してくださいました。セミナーではヨーロッパにおける多文化共生政策についてのお話が、また、午後には、学会の基盤となる多文化関係学について問題定義が幾つかありました。その後、学会立ち上げ初期の会員も含めて、活発な討論が行われました。

大会の運営を支援して下さった多くの大会委員の方々にも感謝いたします。とくに、学生会員の方が一生懸命援助して下さり、学生アルバイトの皆さんを温かく導いてくださいました。実行にあたり、参加者の皆さんにはいろいろご不便をおかけしたと思いますが、振り返ってみますと、そのような点はほとんど会場又はその場で生じたもので、次回の大会に参考になる反省点は少ないと思われました。私は教育者ですから、何事も学ぶ努力をしようと思いますが、本学会の大会委員長として年次大会に関わるのは一生に一度だけなので、自分自身の「次回のために」ということにはないように思われます。たとえば、学食2階で行われた懇親会では、会場にマイク設備のなかったことがその場でわかりました。これはローカルな事情で、事前にわかっていたら価値のある情報でしたが、大会が終わってしまった今、我が共同体にとって、価値のない情報となってしまいました。ただ、そのマイクなしの状況を見て、副委員長の河野康成さんは、自発的に司会を務めてくださり、その主体性は「学べるなあ」と思いました。

皆さん、本当にご苦労さまでした。そして、ありがとうございました。

大会委員長 John E. Ingulsrud (明星大学)

●プレ・カンファレンス・ワークショップ

「テキストマイニングによる社会文化研究へのアプローチ」

研究を行うにはまずは研究課題をもつことが重要であると同時に、研究方法を学ぶことにより、新たな研究課題の発見につながることもまた事実であると思われる。本ワークショップでは、自分にとってはまったく新しい手法であるテキストマイニング(以下 TM)を学ぶ機会に恵まれた。

前半では、立命館大学教授である稲葉光行氏による「グラウンデッドなテキストマイニング・

アプローチの提案」が行われた。TM を実施するために、今回は無料でダウンロード可能なソフトウェアである KH Coder と、Microsoft Excel を用いての方法が紹介された。TM では、仮説演繹的な研究が一般的には適しているとされるが、今回の実習では、いわゆる「質的研究」法のひとつであるグラウンデッド・セオリー・アプローチに応用する試みが実例をもってわかりやすく紹介された。

後半のセッションでは、立教大学リーダーシップ研究所の河野康成、数理システムの小木しのぶ両氏により、TM 用のソフトである Text Mining Studio を使った実習が行なわれた。前半セッションで大まかに TM を把握した上で臨む後半では、より具体的な分析プロセスへと集中することができ、ワークショップの構成が活かされていると感じられた。実習では、ソフトの多機能性にとまどうこともあったが、分析の初期におけるデータのスクリーニング、データを解釈しやすい形にまとめる視覚化の有用性を実感できた。TM は意味のある結果を自動的に生み出してくれるものではなく、あくまでも研究者自身の思考や解釈と協働するものである。語りなどの（言語的）テキストは意味論的分析だけでなく、コンテキストを考慮した語用論的分析が重要である。今回の実習ではコンテキスト分析などの機能も紹介され、これらを適切かつ十全に用いていくことにより、TM は、これまでの実証的研究に加え、いわゆる質的研究にも矛盾せずに活用できる方法であることが示された。続編が期待される内容であった。

文責：岡部大祐（青山学院大学大学院）

● 基調講演 「多文化時代における言語とコミュニケーション」 鳥飼久美子氏（立教大学）

鳥飼氏は、私が子供の頃のテレビ画面ですでに同時通訳界のスターであり、ご著書にスタイリッシュな近影が載っていたことを覚えている。今日に至るまで、通訳者や教育者として活躍してこられ、審議会の委員など社会的貢献も知られている。世間のイメージは、「英語の達人」かもしれない。しかし高校生のスピーチコンテストに行かれた時、ジェスチャーまで母語話者をまねずとも自分の判断で語ろう、クリティカルシンキングが大事だと話したら、高校教員の理解は必ずしも得られなかったという。象徴的な齟齬だと思う。

氏はいわば、登った山の上からみえる風景を語っておられると思う。英語を獲得した後に見える、限界や課題を指摘されている。かたや習熟に伴う利点を期待して、熱く努力中の人がある。登山の最中の人視線は、ひたすら山頂に向けられている。関心や関心の所在が異なり、山頂からの景色が想像し難いのは無理もない。



氏は、英語は世界へのパスポートといった単純な構図を裏書きせず、むしろ多言語世界の意義を強調される。母語でこそ自由に表現できて人が尊重される社会が実現する、少数言語を尊重して複数言語の教育を推進しよう、多様性が豊穡の源だと主張される。ではどうわかりあうのかという所では、「通訳者」の社会的役割が強調される。医療通訳や司法通訳の今日的な必要性、莫大な通訳予算を計上する社会実験とも言える欧州の言語政策に言及される。外国語教育の前には言語政策があり、その背景にあるのは望ましい社会のビジョンだとして、言語の社会性に注目を促される。では英語一極化がもたらすデメリットへの気づきと、英語の汎用性や実用性は、現実

■第7回年次大会特集
多文化関係学の構築をめざして
ーミクロとマクロからグローバル社会を考えるー

世界にどう着地させればいいのか。これは多文化環境の最先端を探る、我々学会員の課題になるだろう。多言語主義をどう日本に引きつけるのか、日本人が考え選択していかねばならない。

氏は、外国語をうまく使うには、社会知識や異文化力などが必要とも語られた。私のような心理学者は、言語を伝達方法の一部と見なし、対人交流は有形無形の総合的な心理過程とみている。言語の角度から見える景色だけでは、交流現象の解明にも操作にも限界があると感じることがあるが、それなら心理学の目で必要な能力を解明し、心理教育を成熟させる研究をもっと進めないといけないうだろう。様々に聞き手の探求意識を刺激する、魅力的な基調講演に出会えたと感じる。

文責：田中共子（岡山大学）

●パネルディスカッション「日系ブラジル人との共生を探る」

モデレーター：吉富志津代（NPO 法人多言語センターFACIL）

パネリスト：坂中英徳氏（外国人政策研究所）

パネリスト：イシカワ エウニセ アケミ氏（静岡文化芸術大学）

パネリスト：田中ネリ氏（四谷ゆいクリニック 臨床心理士）

パネリスト：森田京子氏（青山学院大学）



現在日本国内に 31 万人といわれる日系ブラジル人の人々との共生が可能なホスト社会のあり方に関して 4 人のパネリストが「現状と課題」と「その解決策」に関して多様な立場と視点で議論された。

まず日系ブラジル移民の日本「還流」の方向性を決定付けた 1990 年の改正入管法の骨子作りには携わった坂中氏からは「今後 50 年で 1,000 万の移民受け入れを」という方向性が示され、排外主義を廃し、日本の労働市場を開放し、いかに移民労働力を国内に受け入れるか熱く語られた。氏自らが語られた「30 年にわたる罵倒非難の日々」では、排外主義者との戦いだけではなくエスニックソサエティや研究者からの非難の数々とそれへの氏自身の回答など、なかなか現実に関わる機会の少ない貴重な話を伺えた。移民の受け入れの積極推進派である坂中氏が最も問題ととらえるのは日系ブラジル人の子供達の「教育」であり、これは官民挙げて取り組まねばならない問題であると強調された。

次にその子どもの教育現場でフィールドワークによる研究を重ねられてきた森田氏から教育現場における日系子ども達の姿が語られた。現状と課題としては「学校不応ばかりが問題にされ教育達成は後回しになっていた」「ブラジル人学校や NPO、母語教室などの試みも成人後のよい就職などに結びつかない」等の指摘があった。解決策として日本の教育にもリソースがありそれを活用すれば活路はあるのではないかと。そのリソースとは例えば日本のホームルームは時間的にも長くコミュニティとして安定している。そこに外国籍児童が同化ではなく個性を發揮し集団に貢献し、適応できれば達成感を得る、そのプロセスはブラジル人児童だけでなく日本人児童にも多くの教育効果をもたらすだろう、と語られた。

イシカワ氏からは浜松の日系ブラジル人家庭の詳細な調査データから親の労働条件の不安定さが子どもの教育に悪影響を与えている点や共に学校や地域に暮らしているながら実質的には交流のないホスト社会と日系ブラジル社会のメンバー達の姿を浮き上がらせた。

田中氏は臨床心理士の立場から、子どもと彼らを取り巻く人々の間でコミュニケーションが不足していることが、持っている能力の発揮を妨げており、それは地域の損失にもつながっていること、ホスト社会の人々と日系ブラジル人の人々がコミュニケーションをとりお互いを知る場、その場でコミュニケーションを介在できる人材、そして一人ひとりの意識、それを支える政策など増加・改善されるべき点を多々挙げられた。

またモデレーターの吉富氏は「母語と日本語のどちらかを教えるかではなく一人ひとりの置かれている状況から考えていく必要がある。社会的に生きることのできる教育が求められており、それは日本の子どもに対しても同様だろう。コミュニティもこの新しい住民を受け入れることに適応して双方向に変化していく時代になるのだろう」と語られた。

日系ブラジル人と一言で表現しても、実際は非常に多様な 31 万人の人々が私たちとともに現在この社会を構成しているのである。その共生の諸相がさまざまな視座から浮かび上がってきた 2 時間だった。これからさらなる多様な背景を持つ住民を受け入れ、ともに豊かな共生社会を築くためにわれわれ（この「われわれ」のなかにはもちろんすべての住民が含まれる）は何をなすべきか、改めて考えさせられた。

文責：落合知子（神戸大学大学院）

●ランチョンセミナー 「多文化共生コンセプトとトランスカルチュラルリティ」 前 みち子氏（デュッセルドルフ大学）

このセミナーでは、ドイツにおける多文化共生の現状の報告とその中から生まれた「トランスカルチュラルリティ」というコンセプトについての考察がなされた。以下はその要約である。

ヨーロッパにおいては、1950 年代の末から 60 年代にかけて途上国からの移民が増える「多文化社会状況」が形成されていった。そうした状況に対し、イギリスやオランダはエスニック・コミュニティ単位の統合、フランスは個人の文化的同化といった移民政策が取られた。



一方、ドイツでは「ホスト社会の秩序を維持する手段としての移民政策」が取られた。ドイツにおける移民への対応は、1955 年～1973 年の「ガスト・アルバイター」、1970 年代の定住化傾向の進展、1980 年代の「統合か帰国か」といった 3 つの段階を経て、現在は全人口 8,200 万人のうちの約 9%（730 万人）を占めるまでになっている。

現在、ドイツの多文化共生の基本理念は、2006 年の「統合プラン」(NIP)によって示されている。その理念では、①異文化の同化が目的ではなく、②相互の理解と尊敬、寛容、平等と同権の実現、③紛争の平和的解決と共生のための教育の重要性が強調されている。しかしながら、現実にはさまざまな異文化集団間の葛藤や紛争が起こっており、それらの解決のために、①憲法に明記された基本原則の実現に参画できる権利が与えられ、②適切な移民政策が策定され、③エスニックな帰属が過剰な意味を持たないような連帯活動が必要であろう。

■第7回年次大会特集

多文化関係学の構築をめざして

ーマイクロとマクロからグローバル社会を考えるー

一方、日本においては現在、人口の約1.7%（200万人）の外国人がいるが、日本の移民政策は、外国人登録法にもとづいた出入国管理に集中している。総務省は2006年に「多文化共生の推進に関する研究会」の報告書を発表し、その内容にそったプログラムを作成している。しかし、その内容には、以下のようないくつかの問題点がある。①外国人という二分法の使用、②その際、特にニューカマーとしてのブラジル人などが主に想定されており、従来からの居住者である在日韓国／朝鮮人や中国人に注意が十分に払われていない、③移住者を共に共生し参画する市民として捉える「市民概念」が育っていない。

根本的な問題は、文化というものの理解の仕方にあると思える。18世紀のヘルダーによって唱えられた閉鎖的で、国民国家やエスニシティに関連付けられたコンセプトである「文化性」(culturality)ではなく、ヴェルシュの提唱する「開かれ、他の文化との交流によって常に変容しつつある文化という理解」(transculturality)にもとづく施策が必要であろう。そのための前提として、国家もしくは社会が移住者を含むすべての市民に同等の社会参加のための機会の枠組みを作る必要がある。これは日本の「男女共同参画」という考え方とも共通するものがあり、今後の異文化共生を考える上での糸口になるように思える。

感想：ドイツや日本における多文化状況の事実と政策の分析、トランスカルチュラルリティという概念の提起など、実に内容が豊富で、興味深いセミナーであった。

文責：名嘉憲夫（東洋英和女学院大学）

●オープンフォーラム「多文化関係学の可能性を考える」

今回のオープンフォーラムでは、「多文化関係学の可能性を考える」と題して、学会名「多文化関係学」の「学」確立への道を探った。渡辺、小松、石黒、千葉の4氏の話題提供のもとに、灘光氏の司会、手塚氏のファシリテーターで、フロアーを巻き込んで、自由闊達に議論を深めた。多文化関係学会の社会的認知度を高めるべく、「学」確立へ一歩前進した。



小松氏は、学会設立の経緯と目的について説明し、異文化研究から多文化研究へという潮流を背景として、多文化関係学会の社会的役割の重要性を指摘した。多文化の関係性を捉える視点として、自己理解、他者理解、自文化理解、多文化理解の4つが重要であり、社会システム（マクロ文化）と日常生活文化（マイクロ文化）のありようと関係性を学際的に分析し、経済と環境と文化がうまく調和した社会実現のために寄与することが、本学会の責務だとした。

石黒氏は、いまだ確立されていない多文化関係学の構築のための、学会としての今後の発展方向ならびに他学会との差別化にかかわる2点について話題提供した。氏は、問題提起として、学会員は「多文化関係学」をあいまいに捉えていて、「多文化関係学」を理解する際に参照できるモデルストーリーが学会員の間で共有されていないとし、研究対象と研究方法をめぐって、「多文化関係学」のあり方を多面的に議論し、「多文化関係学」に関する複数の解釈・ストーリーを積極的に提示することが「多文化関係学」構築の必要条件だと述べた。また、他学会との差別化

のためには、多文化関係学会の立脚点として、「3つ以上の文化のかかわり」をテーマとする研究を重視するべきだとした。3つ以上の文化がかかわる場で、どのような関係性が動的に形成されるかという点を解明する原理的理論的研究から、文化のかかわりの中で生きる個々人の生活のありようを記述・分析する事例研究まで、さまざまなことが可能になるとした。

千葉氏は、「多文化関係学」には、複数の学術領域がかかえる問題意識を、「相互関係性」「相互作用性」という視点で捉えなおし、新たな研究モデルを構築する可能性が秘められているという。「多文化関係学」の研究方法の特徴は、多元的な文化のせめぎあい、「関係性」という結節点を見出す作業であり、研究者がこれまでのように単に距離をとるだけでなく、主体的に研究対象にかかわらざるをえない点を考慮に入れて研究するという姿勢をも意味するものではないかと述べた。

渡辺氏は、多文化関係学会は、「多文化関係学」の構築に必ずしもこだわる必要はない。むしろあいまいにしたままのほうが研究対象として何でも取り込んで自由な議論ができるという。学会はそういう議論の場を提供することこそが大事だとした。また氏は、「文化」という概念には隠蔽性をもった戦略があるという。真の文化が、裏表のないものだとすれば、アメリカを中心にさまざまな学問領域でなされてきた文化論には意図的に隠された戦略的目的があり、人種、民族、人権問題等を正面から扱わずに、「文化」という言葉を用いることによって、その生々しい人間の現実を意図的に隠蔽しているという。

文責：細川隆雄（愛媛大学）

●石井奨励賞（学生会員対象）について

今年度は、応募者が3名となり、選考委員3名で申請書、予稿集原稿、当日の発表を厳正に審査した結果、非常に残念ですが、該当者なしということになりました。3件とも、非常に独自性があり、貴重な研究で、多文化関係学への貢献度が高い研究とみなされたのですが、あと一步、研究の深化が求められるという判断になりました。今後の研究の進展を期待したいと思います。今年度は、学生会員の発表者の数は少なくなかったのですが、石井奨励賞への応募者が少なかったため、来年は、ぜひ多数の方に応募していただけるよう、一層のPRにも努めていきたいと思っております。

文責：石井奨励賞選考委員長 松田陽子（兵庫県立大学）

地区研究会報告



■北海道・東北地区研究会（藤女子大学「キリスト教研究所」ジョイント研究会）

日時 2008年7月12日

場所 藤女子大学北16条キャンパス

話題提供者(1) 渡辺崇子氏（塾講師）

「津田梅子による女子開拓教育～新渡戸稲造と妻メリーとの接点に着目して～」



2008年7月12日、藤女子大学で開催された多文化関係学会地区研究会にて、渡辺崇子氏による「津田梅子による女子開拓教育 ～新渡戸稲造と妻メリーとの接点に着目して～」という報告を聞く機会を持った。最初の日本人女子留学生であり、また女子高等教育の推進者である梅子は、第1回目の米国留学経験で文化や価値の多様性を知り、男尊女卑で伝統主義の風潮が深く根を張る日本社会に疑問を覚え、女性も男性と同様に高度な教育を受け、自立をするべきである、という信念を強く持ったという。こうした梅子の女子高等教育に共鳴し、彼女の二度目の渡米（クエーカー教徒の Dr. J W. Taylor によって建てられたプリンマー大学への留学）を支援したのが、フレンズ派のクエーカー教徒の人々と新渡戸稲造夫妻である。新渡戸稲造はその大学留学の際に、女子高等教育を支持するクエーカー教フレンズ派の婦人外国伝道会にて日本における女子教育の必要性を説き、後に普連土女学校を設立したが、妻メリーとは、この会で出会ったという。こうした人びととの出会いと支援を通じて梅子は、その後日本における女子の高等教育を推進する上で欠くことのできないネットワークをしっかりと作り上げ、1891年には「日本婦人米国奨学金」設立、1900年には日本で最初の私立女子高等教育機関である「女子英学塾(現津田塾大学)」を開校したのである。

津田梅子の生涯に触れて、梅子の女子教育にかける熱意と実行力に改めて感服した。男女の別なく十分な教育を享受してきた私たち現代女性だが、それは梅子の信念と努力があってこそであることを知った。また、6月中旬に一年間の米国留学から帰国した私にとって、梅子の経験したカルチャーショックや日本文化の相対化を経て湧き上がる疑問、という一連の流れには、強く頷けるものがあった。アメリカにおける女子教育の発展や、意志や意見を言語化するコミュニケーションスタイルの相違、変化を厭わない米国文化に、梅子の価値観はおおいに刺激されたものと思われる。

梅子の人生は、実り豊かであったように見える。現在の女子高等教育の礎を築き上げた梅子の信念は、後世にわたり評価されるに違いない。

文責：播磨かおり（藤女子大学4年）

話題提供者(2) 終 暁生氏（藤女子大学）

『赦す』ということ

2008年7月12日、藤女子大学で開催された多文化関係学会 北海道・東北地区研究会で、終暁生氏が聖書学の視点から「赦す」ということについて講演をされた。はじめに旧約聖書における争いと赦しについて解説をされ、次に新約聖書における赦しを7つの例を通じて紹介された。終氏によれば、聖書は罪を「負債」と解釈するということであった。

赦しはキリスト教にとっては重大な意味を持つが、私の祖国である中国においても何千年から成り立つ文化の流れの中で、それは大切な倫理観であり、人生観の一つでもある。中国の古典儒家經典である「論語」の中で、孔子はこう語る。「其恕乎、己所不欲无施于人」。これは、つまり、「人には迷惑をかけないこと、自分の好まないことを人にさせたり、押しつけたりしてはいけない」、「言外の意は若し人に傷つけられたならば許すべきだ」という意味である。この「恕」は赦すという意味でもある。一方、「思いやり」という日本語は私が最も好きな言葉の一つである。この言葉は「相手の立場や心情に心を配ること」だが、それはつまり「人を赦す事」につながる

態度ではないだろうか。

赦しは対人コミュニケーションに限らず、国と国の間でも大事な意味を持っている。そして、残念ながら歴史・文化背景の違いから、一部の国々では互いに誤解しあったり、場合によって怨みあう現象すら生じている。たとえば、日中間では、戦争の影響もあり、一部の中国人が日本に対して違和感を持っている。特に 2005 年の小泉元首相による靖国神社参拝は反日デモへと発展し、日中関係を著しく悪化させた。逆に今年は毒餃子事件が起こり、日本人の中国食品に対する信頼を失ってしまった。日本に留学している私にとっては、双方ともに悲しい事件であり、とても辛い思いに苛まれた。

相手の気持ちを考え、相手の立場から物事を考えることができれば、私たちは決して相手を悩ませたりすることはないであろう。また、人に傷つけられたと感じるときは、怒りの代わりに赦しの心を持ちたいものである。これはインドのガンジーが抱いた理想とも相通じる態度かもしれない。世界の平和もこうした態度なくして達成できるものではない。

聖書学の視点からみた柗氏の「赦し」にかかわるご講演は、全体を通して奥が深いものであった。「赦し」は平和の鍵であるということ、また、社会の構成単位である私たち一人ひとりが他者に対する思いやりを持つことの本当の意味を教えて下さったのではないだろうか。

文責：呂 盈盈（札幌大学大学院）

■ 関東地区研究会(「ホラロジーの会」ジョイント研究会)

日時 2008年7月26日

場所 青山学院大学

話題提供者(1) 石黒武人氏（明海大学）

「多文化組織における日本人リーダーのコミュニケーション行動：フォロワーの視点に対するライフストーリー・インタビューを中心にして」

今回の関東地区研究会は、ホラロジーの会とのジョイントという形で実施され、非常に活発な議論が展開された。以下に石黒武人先生の研究発表の概要と感想を述べる。石黒氏の発表は、研究テーマ、研究目的、研究方法、調査結果・考察、説明モデルの提示、研究の評価・限界及び今後の課題という段取りを踏み、非常に論理的かつ丁寧に進められた。本研究は、多文化組織における日本人リーダーのコミュニケーション行動の傾向性を、英会話学校・英語学校という場を用い、異文化出身フォロワーの視点から検証された質的研究である。研究方法は、フォロワーの認識世界に接近するという観点から対話的構築主義に基づいたライフストーリー・インタビューが適用されている。この研究方法は、個人の語りを記述し、語りにおける解釈の規則を明らかにする性質がある。結果、フォロワーの視点からすると、日本人リーダーのコミュニケーション行動が異文化出身フォロワーとの分離を助長する傾向があると提示された。石黒氏は、これらのコミュニケーション行動は、異文化出身フォロワーの日本人リーダーに対する「違和感」と「不信感」を誘発し、その関係性に落差と深刻なコミュニケーションギャップが存在するとも指摘された。

本研究は、健全な理論的枠組みに裏打ちされた質の高いものであるが、私自身は、先ず石黒氏の研究者としての真摯な姿勢と熱意ある語り口に非常に感銘を受けた。本研究のような人の認識世界を研究データとして扱う場合、研究者の自分を見つめる批判的視線だけでなく、地道で丁寧な分析作業が必須になると思われる。石黒氏の分厚い研究資料と発表の背後にある長い努力を垣間見ながら、彼の研究者としての高い資質を感じ、私自身非常に刺激を受けた。また、研究内容、



研究方法、研究アプローチなどに関する多様な質問とコメントが参加者と交わされたことも、知的好奇心を刺激する質の高い発表であったことを物語っていた。

文責：坂井二郎（立教大学）

話題提供者(2) 岡部大祐氏

（青山学院大学国際コミュニケーション専攻博士後期課程／同大学総合研究所特別研究員）

「多元化する医療と多文化化する医療：医療におけるコミュニケーション問題の批判的再考」

患者として、研究者として、医療でのコミュニケーションの問題にどう向き合うか——。この日の話題は、“研究対象との距離”という微妙で、かつ基本的な問題を軸に展開された。

開口一番、「研究会というなかば公開の場で体験を発表することは、個人的にはリスクを伴う実験的な試みでもある」と語った岡部氏。医療現場に身を置く患者の目線を基本に据えながら、1) 言葉の視点、2) 文化の視点、3) 社会の視点から医療におけるコミュニケーションの問題についての考察を披露した。

例えば、1) 言葉の視点に関しては、抗がん剤による苦しい治療過程で発せられた看護婦からの一人称単数の慰めの言葉（「私も祈りますから・・・」）の効果が、一人称複数（「私たちも祈りますから・・・」）といかに異なるのかに気付き、言語に焦点を当てる重要性を感じたという。また、3) 社会の視点からは、「医療」は社会的構成物として、社会的な文脈の中で再定義されるべきだと強調した。医療が社会的であることを踏まえ、患者は批判されにくいのに医療現場に対しては一方的な批判が起きやすい現象を紹介しながら、医療現場と研究者とが協力しながら理論構築することへの期待も示した。

「研究者」としての立場、「当事者」としての立場にどう向き合うべきかというテーマだけに、フロアーからも参加者自身の経験を踏まえたコメントや質問が多く出されたが、岡部氏本人はこう答えている。「当事者としての経験は避けられない。でも、それを前面に出した関わり方はしない」。

紹介された3つの視点はいずれも興味深かったが、個人的には1)の「言葉の視点」が最も印象的だった。蒲柳の質ゆえに、留学・出張・旅行先でたびたび短期の患者として現地の医療行為を受けた体験からも、言語の視点から考えるべき問題がまだ潜んでいるように感じられるためである。

文責：可部繁三郎（青山学院大学大学院）

■ 関西・中部地区合同研究会

日時 2008年7月5日

場所 関西学院大学 大阪梅田キャンパス

テーマ 「異文化における日本人のコミュニケーション行動を探る」

話題提供者(1) 柳本麻美氏（桃山学院大学）

「オーストラリア・カウラ捕虜収容所日本兵脱走事件：日本人のコミュニケーション特性からの考察」

本発表は、1944年8月5日、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州カウラにあった戦争捕虜収容所で発生した、日本兵捕虜による集団脱走自決事件について、日本人の行動の要素の点から考察したものである。柳本氏はこの事件について修士論文で扱ったことがあり、今回は執筆時には気づかなかった問題点などについても、再度考えを深めてみたいとのことであった。

戦時中カウラに設けられた捕虜収容所では、中で区切られた地区別に各国の捕虜を収容しており、日本人捕虜は42の班に分けられていた。そんな折、ある収容所で起きた暴動を機に、捕虜の一部を別の収容所に移すことが通告された。その後すぐ行われた班長会議ではそれに反対する意見はそれほど多くなかったのだが、1人の班長が脱走を持ちかけたときに状況が一変する。その意見が元となって班員による投票が行われたが、その結果、脱走に賛成したのが8割に上ったのである。すぐに計画が練られ、当日の深夜に実行された。彼らの目的は脱走そのものではなく、武器のない収容所から脱走して自決することであり、結局死者234名、負傷者108名を出した。

柳本氏の疑問は、(1) 行動に関わる要素は、戦陣訓の他にも、日本人の特性、捕虜収容所という場所における偽りの身分関係、建前と本音の併存、オーストラリアでの異文化衝突など色々考えられるが、それらがどう絡み合っているのかということ、(2) 当初それほど多くの捕虜が脱走に賛成していたわけではなかったのに、たった1人の班長の意見を契機に突如賛成に転じ、死へと向かうだけの脱走計画に参加したのはなぜなのかということ、(3) このような日本人捕虜の行動については、「生きて虜囚の辱めを受けず、云々」という戦陣訓に基づく説明がされやすいが、海軍兵が最初に収容され、後に陸軍兵が収容されるようになったカウラにおいては、必ずしも最初から日本兵捕虜が脱走を計画していたわけではなかったのに、このような事態に至ったのはなぜなのか、といった点に向けられていたようである。

質疑応答では、日本兵が取った行動に注目が集まり、その行動を引き出した日本人の特性について議論が交わされた。その中で、日本人には普段は温厚であるが、切羽詰まった時には突拍子もない行動を取る特徴があり、そのことについての検討が必要なのではないかという意見が出された。この事件については、興味を持っている人も多く、また研究会の3日後にカウラの事件を扱ったドラマが放送されるということもあり、質疑応答は盛り上がりを見せた。

文責：西端大輔（大阪大学大学院）

話題提供者(2) 中川慎二氏（関西学院大学）

「デュッセルドルフの日本人社会の調査をはじめて」

中川氏は、ドイツの在留邦人の多くが集住しているデュッセルドルフを拠点に、在住日本人への面接によるライフストーリーの語りを中心に、参与観察や、文献調査をもとに、ドイツにおける日本人社会と現地社会とのかかわりを描き出すための調査を行っており、その研究について報告された。

デュッセルドルフには、ドイツ全体の日本人の22.8%、7,681人が集住しており、日本クラブの個人会員は約5,000人という規模で、駐在員とその家族からなる日本人社会が、現地に住み着いた日本人との一定の関係を保ちながら存在している。これほど集住するのは、日本人のためのインフラとして必要とされる組織が揃っているためであり、その中心に「在ドイツ日本商工会議所、日本クラブ、日本人学校」が位置している。ちなみに日本人学校はヨーロッパ最大規模である。いわゆる「本住まい」の意識の強い労働移民からなる日本人社会と違って、駐在員は3年から6年程度で異動になるケースが多いために、デュッセルドルフでも「仮住まい」の意識が強い



という。面接をした駐在員の多くは日本人コミュニティへの意識が強く、ドイツ社会と交わる接点は限られているという。

また、広義に捉えた現在のデュッセルドルフ周辺の日本人社会は構成メンバーの高齢化と若齢化の問題を抱えている。高齢化は、戦後ドイツに労働力として派遣された人、駐在員としてドイツに渡った後に住み着いた人たちが70歳代から80歳代になっていることから起こっている現象で、現在では高齢者介護を目的とした日本人のグループがドイツ国内で活動している。若齢化は、駐在員の子供たちの年齢層が低くなってきており、中学・高校の年齢から幼稚園・小学校にその中心が移動してきていることである。中川氏によると、彼らの日本人コミュニティとの関係の持ち方は、(A)どちらかという日本人コミュニティに暮らしている、(B)どちらかというドイツ人コミュニティに暮らしている、(C)どちらの空間も行き来している(ハイブリッド)、(D)高齢化してハイブリッドになりつつある、という4つのタイプに分類される(仮説)という。

今後、さらに詳細な分析が行われるということで、報告の続編が期待される。このような海外の在留邦人の分析を通して、日本に在住する外国人のコミュニティの日本社会との関係性や彼らの日本社会への帰属意識の多面性の問題を理解するための重要な枠組みが提示されるのではないかと思う。

文責：松田陽子（兵庫県立大学）

■中国・四国地区研究会

日時 2008年12月13日

場所 伊予市生涯研修センター「さざなみ館」

話題提供者

(1) 宮脇和人氏（愛媛大学大学院）

「伊予市のびっくり鯨騒動と鯨塚」

(2) 西浦慎介氏・都子大雅氏・大塚秀一氏（愛媛大学学生）

紙芝居「くじらのはか」くじらクイズ 「西海地域における鯨塚と鯨文化」

日本列島には、各地に鯨塚が残されている。今回の中国・四国地区研究会は、鯨塚がある伊予市湊町で実施した。文化的資源として、鯨塚を再確認し、研究発表後に、湊神社にある鯨塚を見学し、鯨肉の試食会も行った。地元の小学生を招待し、紙芝居によって、鯨塚がどのような理由で建てられたのかという点をわかりやすく説明した。小学生を中心にほぼ60名の参加があった。前半は、宮脇氏が「伊予市のびっくり鯨騒動と鯨塚」というテーマで、1909年に伊予郡中沖にやってきた巨大鯨の大捕り物と鯨塚建立の経緯について説明した。氏は、地元の古老から、詳しく聞き取った内容を忠実に子供たちに伝えた。子供たちの幾人かは、次の世代に、今回聞いた話を伝えていくであろう。言い伝えが伝承されていくプロセスを実感することができた。ちなみに今回の報告は、宮脇・細川著「鯨塚からみえてくる日本人の心」（農林統計出版、2008年）の第4章に相当する。話のポイントは次の3点にまとめられた。①伊予市の鯨騒動で、郡中の若者たちが捕った鯨は、コク鯨であった。このコク鯨は瀬戸内海で生まれたものかもしれない。②下関の捕鯨会社から来た男と、郡中の若者たちが協力したおかげで、鯨をしとめることができた。③



地域の人々は、捕った鯨資源を利用したあと、お寺と神社の両方で手厚く鯨をまつた。

後半は、西浦、都子、大塚各氏が、紙芝居「くじらのはか」、クジラクイズ、パネル展示によって、鯨文化、鯨の基礎的知識について、子供たちにわかりやすく説明した。紙芝居は彼ら自身が創作した。15 の場面設定で、絵と台詞をみんなで議論して作成した。ほんのさわりの部分を紹介しよう。「むかしむかし、魚がとれなくて困っていた漁村がありました。きびしい冬を目前にひかえた村びとの生活はとても苦しいものでした。ある朝、村びとが1頭の鯨を見つけます。そして……。終わったあと、会場から大きな拍手がおこった。紙芝居をみて子供たちは何かを感じ取ったようであった。発表者らは、鯨塚を建てるという行為を紙芝居のストーリーに仕立てて、子供たちに、「自然物にたいする畏敬の念」「いただきますの感謝の念」をわかりやすく伝えようとした。彼らのメッセージが子供たちに十分伝わった。なお、研究会の内容については、愛媛新聞と読売新聞が後日、報道してくれた。

文責：細川隆雄（愛媛大学）

■九州地区研究会

日時 2008年9月13日(土)

場所 九州大学 六本松地区キャンパス

話題提供者(1) 曹 美庚氏（九州大学大学院言語文化研究院）

「コミュニケーション距離と異文化理解—スキンシップ許容度の日韓比較を中心に—」

コミュニケーションにおけるスキンシップの許容度について、最もスキンシップの頻度が高いと考えられる大学生を対象にした日韓それぞれの数量データをもとに文化相違の提示が行われた。データは其々、同性・異性のカテゴリー、親・兄弟・親友、親しい先輩・後輩、普通の友人、知り合い程度の人のカテゴリー、またスキンシップ上の露出度によって手、腕、肩などのカテゴリーに分類され、多面的な分析のもとに提示された。また、実例としての映像や写真が具体的な例として示された結果、どのカテゴリーにおいても、日本人のスキンシップは、韓国人に比べて、自然に許容できる傾向が低いことがわかった。

質疑応答（例）

Q：年齢や性別の相違があっても、韓国ではスキンシップが許容されるのか。

A：韓国でも目上の人でかつ異性間でのスキンシップは、消極的になる。

Q：日本のデータで、幼少からスキンシップが激減しているのを見ると、育児のやり方そのものが変わってきたのか。また、韓国と異なったやり方であるのか。

A：データでの証明はされていないが、日本では昔に比べるとスキンシップが減少したという話をよく聞く。それはしばしば、戦後の「大人になる教育」が変化したからではないかといわれるが、きっかけはまだ不明である。また、韓国では、スキンシップと成熟度を関連させた教育は、日本ほどなされていないので、大人になってもスキンシップをすることは不自然なことではない、と考えられている。

話題提供者(2) 高松里氏（九州大学 留学生センター）

「臨床心理地域援助の現状と課題—日本人の『働き方研究』—」



留学生センターのカウンセラーである話題提供者の紹介や、著作を紹介しながら、自身の活動内容が紹介され、話題提供者が病気の誤診を機会に考えた「働き方」について、「働き方研究所」の趣旨とともに報告がなされた。体験談や写真、生き方についての引用句を用い、さらに「悪魔の言葉シリーズ」や「バーンアウト」のプロセスなど、現在の生活について、多様に考察するきっかけが提供された報告であった。

質疑応答（例）

Q：「働き方研究所」は誰でも入れるのか。

A：所長に参加の旨を伝え、登録をすれば誰でも会員になれる。

Q：「バーンアウト」の予防法はあるか。どのようなことをすればよいか。

A：予防法は人や状況によって様々だが、「ことばに表すことが出来ない不安」であっても、似たような境遇の人や、話を聞いてくれる場所を持つておくことができれば、不安が緩和されることが多い。また、周囲にそのような人を見つけても、その人が倒れるのを予防することは難しいが、後遺症を考えると、できれば早い段階で自分の振る舞いについて考えるきっかけを持つのが望ましい。

今回、多文化関係学会の研究会には初めて参加させていただいた。形式は、普段の学会と同様に発表者の報告、質疑応答という内容だったにも関わらず、質問や意見が自由にやり取りできる研究会の雰囲気が、とても心地良く感じた。また、参加されている方それぞれの異文化体験や、異文化に対する視点や考え方を身近に感じ、それについて意見交換をする場として、貴重な議論の場であった。

文責：合澤由夏（九州大学大学院）

地区研究会のご案内

■ 2008年度 第2回関東地区研究会

2009年3月15日に関東地区研究会の定番となりつつあるホラロジーの会とのジョイントによる会合を開催いたします。「お蔭さま」と「持続可能性」という二つの概念を結ぶユニークな視点から理論面での斬新な試みのお話と、日本に憧れてやってくる短期留学生の教育現場から留学の光と影の実践研究報告です。どうぞふるってのご参加、活発な意見交換を楽しみに皆様のご参加をお待ちしております。

日時：3月15日(日) 14:00～17:00

場所：立教大学池袋キャンパス 12号館 地下1階 第3第・4会議室

会費：無料。なお語らいを楽ししいものとするため茶菓を用意いたしますので、当日募金箱をお返しし、ご協力をお願いいたします。

問い合わせ・申し込み（3/11まで）：手塚千鶴子 E-mail：ctezuka@ic.keio.ac.jp

第1部 研究会

話題提供者：手塚千鶴子氏（慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター教授）

「短期留学生の日本留学の光と影：日本らしい異文化交流を求めて」

要旨：最近、日本文化、特に漫画やビデオゲーム、アニメなどポップカルチャーの海外への発信・輸出が盛んである。これは外国文化の受容に熱心であった日本にとり、文化交流の転換点といえる。それはまた日本語や日本文化を学ぶ短期留学生にとり、文化学習以上の、成長の可能性もはらんでいる。日本人学生との混交授業やカウンセリングから垣間見える、彼らの日本留学の光と影、留学にかける熱い夢や憧れ、日本人との異文化コミュニケーションの困難や挫折、カルチャーショックを通しての、彼らや日本人学生の学びや自己成長を、学生レポート、コラージュ、絵などまじえながらお話し、大学における異文化コミュニケーションの可能性を探ってみたい。研究成果というよりは現場からの研究の端緒を皆さんと分かち合いたい。

略歴：1986年ミネソタ大学大学院卒業、教育心理学博士。慶應義塾大学国際センター職員、環境情報学部助教授を経て、日本語・日本文化教育センター教授。カウンセリング、国際センター日本研究講座以外に、身体知プロジェクト、地域との連携を探る「三田の家」プロジェクト参加。専門は多文化間カウンセリング、日本文化論。研究は原爆や怒り、対人葛藤をめぐる日本人のコミュニケーション、異文化交流、身体知。日本の大学らしい学生間異文化交流促進と学びの道を模索中。

第2部 ホラロジーの会

話題提供者：坂井二郎氏（立教大学ランゲージセンター教育講師）

「持続維持可能な社会における『お蔭様』のコミュニケーションの意義と役割」

要旨：多文化関係の理解は非常に複雑で多岐にわたっている。その複雑で多岐にわたった活動の共通の意義があるとするなら現代多文化世界の「持続維持可能性」(sustainability)に何らかの意味で寄与することだと考える。ここでこの持続維持可能性というテーマと非常に深くリンクしている事柄の一つに、多文化を含む、さまざまな関係性の理解の深化のプロセスが挙げられると思う。様々なレベルにおける様々な関係性の更なる理解とその深化は、維持可能な社会への灯火とは言えないであろうか。しかしながらコミュニケーション学（異文化コミュニケーション学、多文化関係学などを含む）をはじめとする関係性理解を主なテーマとする学門分野では、フォーカスがあたりやすい分野と、テーマとして取り上げられにくい分野が存在する。これは当たり前かもしれないが、持続維持可能な世界の確保を本気で考えるのであれば、今までフォーカスが当たってこなかった分野やテーマにおける関係性の理解は非常に重要だと考える。このホラロジーの会では、そのフォーカスが当たってこなかった分野やテーマや、そこに内包されている関係性を、「お蔭様」と位置づけ、「お蔭様」のコミュニケーションの意義と役割を持続可能性とリンクしながら論じていきたいと思っている。

略歴：オクラホマ大学コミュニケーション研究科博士課程修了。異文化コミュニケーション専攻。千葉大学、湘南工科大学など兼任講師を経て、現在立教大学ランゲージセンター教育講師。対人コミュニケーション、異文化コミュニケーションの現象学的分析に興味を持ち、現在は、持続維持可能性における「お蔭様」のコミュニケーションをコミュニケーションのリサイクル運動と位



置づけ、そのプロセスを模索している。

■ 2008年度 第2回 関西・中部地区研究会

日時 2009年3月7日(土) 13:30~17:00

場所：名古屋学院大学〔白鳥学舎1階102号室〕〔名古屋市熱田区熱田西町1-25〕

会費：無料

問い合わせ・申し込み：小松照幸（名古屋学院大学・経済学部）

TEL：052-678-4078(内線)2703 / E-mail: komatsu@ngu.ac.jp

テーマ：ネイティブ・ピープルへの抑圧の歴史 ～地域文化の破壊と創造～(仮題)

第1部 (13:30~15:00)

話題提供者：輿石^{こしいし} 正^{まさし}氏

「未決・沖縄戦 — 沖縄戦はまだ終わっていない：戦争、基地、平和、沖縄文化」

略歴：1946年山梨県生まれ。全共闘運動に深くかかわる（1967～）。代々木ゼミ、河合塾で数学担当、全国をとび回る。1986年沖縄・名護市嘉陽に移住し、現在に至る。名護高等予備校、「じんぶん企画」代表（一貫して北部の高校生・浪人生に向き合い、数学を中心に現在も教壇に立ち続ける）。普天間米軍基地の辺野古移設反対の名護市民運動に積極的に加わる（1996～）。「エコネット・美（ちゅら）」設立同人（ヤンバル自然体験・じんぶん学校の設立から現在も深くかかわる）（多文化関係学会事務局長・小松の親友）

著書・著書：共同編集執筆『日本社会運動史人物大事典』（1996年）／『沖縄を知る事典』（2000年）／『沖縄を深く知る事典』（日外アソシエーツ、2003年）

映画制作・プロデュース：「基地は要らない・命の響き」（2002年）／「未決・沖縄戦」（2008年）

* 思想の科学会員／新聞・雑誌に雑文を書き散らす

第2部 (15:30~17:00)

話題提供者：青山晴美氏

「アボリジニの歴史と文化、200年にわたる白人との関係：人の尊厳、和解(Reconciliation)と許し」

略歴：愛知学泉短期大学・准教授。米国オレゴン州立大学・言語学部卒、南オーストラリア州立大学・アボリジニ学部修士課程修了。

「アメリカでの生活のなかで、『アジア人』というマイノリティーの立場を経験し……勝者である『白人』の論理が優先される社会……『自分と似た人』を探して旅に出て……合衆国、カナダ、メキシコ各地を旅して、さまざまな先住民の人々に出会い先住民にかかわることを生涯の仕事として決心した。その後、中国大陸を横断しチベット人やヒマラヤ人やヒマラヤ山間少数民族にも心を奪われ、アボリジニとの出会いを求めてオーストラリアへ……」（著書から）

著書：『女は冒険：中国、チベット、ヒマラヤを越えて』（エフエー出版、1987年）／『もっと

知りたいアボリジニ：アボリジニ学への招待』（明石書店、2001年）／『女で読み解くオーストラリア』（明石書店、2004年）／『アボリジニで読むオーストラリア：もうひとつの歴史と文化』（明石書店、2008年）

近著紹介



抱井尚子・末田清子監訳

『グラウンデッド・セオリーの構築 社会構成主義からの挑戦』

ナカニシヤ出版、221頁、2008年11月

原著：Kathy Charmaz 著

"Constructing Grounded Theory: A Practical Guide Through Qualitative Analysis",
2006年, Sage, London

データやフィールドの声に真摯に耳を傾け、それらを忠実に再現するための新しい手法が、具体的な例示を用いて明快に語られる。初学者から豊富な調査経験を持つ質的研究者に至るまでの幅広い読者層が持つ、根源的な問いや研究実践上の具体的な疑問に答え得る、稀有の一冊。



久米昭元・長谷川典子著

『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション』

有斐閣、261頁、2007年9月

国内外、国際舞台など様々なところで起きる摩擦を異文化コミュニケーション上のケースとして取り上げ、多様な角度から掘り下げた実践的入門書。



小坂貴志著

『異文化コミュニケーションの A to Z』

研究社、266頁、2007年7月

理論と実践を分かりやすく説いた本。滞米生活 13 年の著者ほか多くによる自己省察がクリティカル・インシデントやストーリーの形で盛り込まれている。



小坂貴志監訳、ジュアン・アントニオ・フェルナンデス他著、大槻 恵一他訳

『チャイナ CEO—多国籍企業 20 社の CEO が語る中国体験と助言』

バベル、322頁、2008年8月

多国籍企業の CEO による中国ビジネス成功のための秘訣紹介。



清ルミ著

『優しい日本語』

太陽出版、256頁、2007年10月

外国人の眼からみた日本語の特徴を切り口に、日本人の思考様式、文化、社会を、「おかげさま」「わざわざ」「ひとつ」など、英語に翻訳しにくい表現にまつわるエピソードでポジティブに語った本。

近著紹介



清ルミ著

『ナイフとフォークで冷奴』

太陽出版、226 頁、2008 年 10 月

「日本人にとっての常識＝他文化の非常識」といった実例を軽いエピソードで紹介。異文化コミュニケーションの非言語面、特に価値観のズレについて気づきを促すための入門書。



田崎勝也著

『社会科学のための文化比較の方法－等価性と DIF 分析』

ナカニシヤ出版、158 頁、2008 年 6 月

調査・質問項目に潜むバイアスを検証する DIF（特異項目機能）分析について書かれたもの。前半は理論的な側面の解説、後半は DIF 分析法について具体的に解説。



田崎勝也著

「文化心理学とコミュニケーション－社会・文化・歴史的に形成される人間」、
フェリス女学院大学編

『多文化・共生社会のコミュニケーション論－子どもの発達からマルチメディアまで－』

翰林書房、pp. 5～32、2008 年 7 月

私たちの周りには他者を排斥し、否定する言説やできごとがあふれている。ヒューマンイズムのまなざしと社会科学的分析によって人間や人間の間をとりえ、共生のコミュニケーションを考える。



鳥飼久美子著

『通訳者と戦後日米外交』

みすず書房、408 頁、2007 年 8 月

同時通訳者のオーラルヒストリーから通訳の役割を考察。英語版 “*Voices of the Invisible Presence: Diplomatic Interpreters in Post- World War II Japan*” が 2009 年 1 月 John Benjamins より刊行予定。



鳥飼久美子監訳

『通訳学入門』

みすず書房、312 頁、2008 年 9 月

原著 Póchhacker, F. “*Introducing Interpreting Studies*” (2004, Routledge)。本格的な通訳理論研究書の初の日本語訳。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教員と院生による共同訳。



野津隆志著

『アメリカの教育支援ネットワーク：

ベトナム系ニューカマーと学校・NPO・ボランティア』

東信堂、201 頁、2007 年 10 月

現地調査に基づき、アメリカでいかに学校・NPO・ボランティアが協働し、ベトナム系生徒の教育を支援しているかを考察している。



松岡昌幸著

『コノシユア・シニア留学ーシニア世代のための記憶に残る旅のすすめ』

アップフロントブックス、208頁、2008年9月

留学の普遍的な基本構造および世界遺産の構造を解明することにより次世代の留学形態（記憶に残る旅はいかに形成されるか）を提案。



而立会訳・三瀧正道監訳

『今、中国が面白い』

日本僑報社、237頁、2008年5月

人民日報から中国の諸問題を鋭く抉った記事60本を選び、4篇ずつ15ジャンルに分け寸評付で紹介。人民日報がここまで書いていることはまず知られていない。朝日の書評でも絶賛。



吉富志津代著

『多文化共生社会と外国人コミュニティの力
ーゲットー化しない自助組織は存在するか？ー』

現代人文社、192頁、2008年10月

多様になった地域社会の住民たちとの共生の方策について、著者自身の市民活動における経験からその可能性を探る。

理事会議事録（抄録）



2008年度 第1回理事会

日時：2008年6月22日(日) 13:00～17:00

場所：立教大学 11号館4階会議室

出席者：(敬称略 あいうえお順) 石井(敏)、磯崎、イングルスルード、久保田、久米、
河野、小松、田崎、松田

オブザーバー：岡部

欠席者：青木、石井(米雄)、伊藤、岩男、抱井、金本、清、手塚、灘光、林、細川

議事録：岡部、磯崎

【報告事項】

- 1) 前回議事録確認
- 2) 2008年度年次大会について (イングルスルード他)
 - ・オープンフォーラムのパネリストとして、小松氏、渡辺氏、石黒氏、千葉氏が決定した。
- 3) 事務局報告
 - ・2008年度は学会費収入が少なくとも50～60万円必要である。



- 4) 支部会について（報告・予定）（ニュースレター13号参照）
- 5) ニュースレター委員会
 - ・13号は6月に送付された。
- 6) 学会誌第5号について（田崎）
 - ・学会誌第4号は論文を15編受け、10編が掲載され、2月に送付された。2008年の第5号は12月に発行したい。
- 7) その他

【審議事項】

- 1) 2007年度決算報告（小松）
 - ・若干の修正を行なったうえ、承認された。
 - ・会員数は292名である。現在の預金残高は合計1,964,820円である。
内訳は、銀行に1,662,849円（7/18/08）、郵便局に301,980円（7/24/08）である。
- 2) 2008年度予算案（小松）
 - ・若干の記載上の修正を行なったうえ、承認された。
- 3) 2009年度年次大会開催校について（久米）
 - ・2009年度の開催候補校は、第一候補：桃山学院大学、第二候補：関西大学、第三候補：関西学院大学、第四候補：藤女子大学である。
- 4) 学会企画について（企画委員会報告）
 - ・企画委員会とは別に出版企画委員会を立ち上げることが提案され、10周年記念に出版することを目指して10周年記念出版編集委員会を立ち上げることとなった。
- 5) 理事の任期について（久米）
 - ・現在の会則（理事の任期3年6期）によると2009年度には10名近くの理事が退任することになり学会運営に支障をきたすので、任期を4期8年にすることが提案されたが、継続審議となった。
- 6) 学会費徴収方法と時期について（小松・久米）
 - ・学会費徴収の会員への通知はニュースレターとは別に行ない、4月に論文募集と学会費徴収をまとめて通知する。
- 7) 大学退職者等の学会費について（久米）
 - ・継続審議となった。
- 8) 文書管理の範囲と方法について（磯崎）
 - ・文書の原物保管は磯崎氏が担当する。PCへのファイル保管は、河野氏、岡部氏が加わって検討する。
- 9) 入会の手続きに関して（河野）
 - ・封筒ラベルに会員番号を入れることと、会費支払い年度を記入することが要請された。
- 10) ホームページについて
 - ・学会誌の目次（論文タイトルと著者名）を載せることが承認された。

- 11) 広報、広告活動について（久米・久保田）
 - ・年次大会の広告は大会委員が担当することが確認された。
- 12) 次回の理事会について
 - ・次回理事会は 10 月 17 日（金） 18:00 から明星大学にて開催する。
 - 第 3 回理事会は 2009 年 3 月 15 日（日）とする（仮）。

2008 年度 第 2 回理事会

日時：2008 年 10 月 17 日（金） 18：30～22：00

場所：明星大学 27 号館 7 階 717 号室

出席：（敬称略、順不同） 久米、手塚、小松、抱井、久保田、田崎、青木、磯崎、
イングルスルード、河野、松田

欠席：清、灘光、伊藤、金本、細川、石井（敏）、石井（米雄）、林、岩男

オブザーバー：稲葉、岡部

記録：久保田、磯崎

【報告事項】

- 1) 前回議事録確認
- 2) 大会準備状況：石井奨励委員は松田理事、田崎理事、西原会員の 3 名で、委員長は松田理事である。
- 3) 事務局より報告（小松）
 - ・学会会員数は 297 名である。残金は銀行に約 157 万円、郵便局に約 50 万円で計 200 万円程である。
- 4) 学会誌第 5 号準備状況について（田崎）
 - ・5 号は、15 編集まり 5 編採択した。印刷は、400 部とした。
- 5) ニュースレター No.14 について（伊藤）
- 6) 企画委員会からの報告（抱井）
 - ・本の出版に向けては、別に出版企画委員会が設立されることが確認された。
- 7) 各地区研究会の報告と予定
- 8) 文書管理委員会からの報告とお願い（磯崎）
 - ・記録文書の欠落部分の収集への協力が要請された。
- 9) その他：
 - ・広報に関しては、久保田理事が他学会との関連リンクに流すこととなった。

【審議事項】

- 1) 会則の改定について
 - 10 年未満の組織を強化するためと、引き継ぎをスムーズにするためにも 3 期目の理事にとどまってもらう必要がある。そこで今回のみ内規 1 (1) の現理事の互選によって選出する理事は、4 期 8 年となる人も対象とすることを特例として認めることを理事会案とし、総会に諮ることとした。また、学会の会則を以下のように変更することを理事会案とし、総会に諮ることとした。



- (1) 任期は1期2年とし、連続2期を限度とする。を追加。
- (2) 任期は1期2年とし、連続2期を限度とする。を追加。
- (3) 任期は1期2年とし、連続3期を限度とする。を追加。
- (5) 任期は1期2年とし、連続3期を限度とする。を追加。
- (6) 顧問 特に任期は定めない、を追加。なお、会費については次回検討することとなった。
- (8) 削除した。

2) 理事選挙について

推薦制度は残し、WEB投票は管理人に任せることとなった。

3) 事務局の今後について（事務局の仕事一覧参照）

紀要販売に関しては、来年3月までは丸善との連携があるので事務局が担当する。
仕事の分担は来年3月に決める。

4) 2009年度第8回年次大会開催校について

現時点で未定であり、11月末までに開催可能な大学を探す。

5) 「学会設立10周年記念出版」について

編集委員会の委員長には久米氏がなり、委員長が委員を指名し、明石書店と話し合いを進める。

6) ハンガリーでの会合について

3月末に実施する。講義や情報の交流を検討する。

7) 大学退職者の学会費について

次回、検討する。

次回理事会は、2009年3月14日（土）または15日（日）とする案が出された。

事務局より

学会の活動情報と連絡先の最新版を次のチャートにまとめました。これにより会員同士の情報交流が活発におこなわれることを期待しています。

活動の種類と概要	対象	連絡・問い合わせ先
1. 学会活動全般について知る [学会の目標、沿革、組織、年次大会・地区研究会などの情報、学会誌、ニュースレター、ホームページ利用法・学会費支払い状況などの確認]	会員・非会員	1. ウェブ管理委員会 委員長 河野康成 (kono@rikkyo.ac.jp) 2. 広報委員会 委員長 久保田真弓 (mkubota@res.kutc.kansai-u.ac.jp)
2. 学会誌へ論文等を投稿する [締切：4月末 発刊：10月中旬予定]	会員のみ	学会誌編集委員会 委員長 田崎勝也 (jsmrsubm@js-mr.org)
3. 年次大会に参加する [第8回 2009年10月17日(土)・18日(日)*16日(金)プレカンファランス・ワークショップ 関西大学 高槻キャンパス]	会員・非会員	1. 学会 HP (http://www.js-mr.org) 2. 第8回年次大会については 大会委員長 久保田真弓 (jsmr2009taikai@yahoogroups.jp)
4. 地区研究会に参加する *関東／関西地区は年2回、 その他の地区は年1～2回	会員・非会員	北海道・東北（年1回）： 伊藤明美 (itoakemi@fujijoshi.ac.jp) 関東（年2回）： 手塚千鶴子 (ctezuka@ic.keio.ac.jp) 中部（年1回）： 小松照幸 (komatsu@ngu.ac.jp) 関西（年2回）： 金本伊津子 (kanakana@my.heian.ac.jp) 四国・中国（年1回）： 細川隆雄 (hosokawa@agr.ehime-u.ac.jp) 九州（年1～2回）： 松永典子(mnori@scs.kyushu-u.ac.jp)
5. 学会入会を申し込む	非会員	学会 HP 入会案内より、Eメールにて申し込むこと。結果は約1週間後にEメールで本人宛、通知される。
6. 学会費の支払い状況を確認する *会員番号とパスワードが必要	会員のみ	1. ウェブ管理委員長 河野康成 (kono@rikkyo.ac.jp) 2. 事務局長 小松照幸 (komatsu@ngu.ac.jp)



■学会誌編集委員会からのお知らせ

投稿論文を募集します！

先日『多文化関係学』第5号を発送した際、次号は特集号のため一般の投稿論文の募集を行わないとお知らせしましたが、第6号でも投稿論文を受け付けることになりました。応募方法などは改めてメールにてご案内しますが、例年通り4月30日の締め切りを予定しております。奮ってご投稿いただきますようお願いいたします。

■Kathy Charmaz 氏 講演のご案内

今回のニューズレターでもご紹介させていただいております『グラウンデッド・セオリーの構築：社会構成主義からの挑戦』（原著タイトル：*Constructing Grounded Theory: A Practical Guide through Qualitative Analysis*）の著者 Kathy Charmaz 氏の講演を青山学院大学において3月14日（土）午後3時より開催いたします。講演終了後には懇親会も予定されております。直接ご本人とお話しをする機会にもなりますので、関心のある方は奮ってご参加ください。詳細および申し込み登録の方法については追って学会メーリングリストを通じてお知らせいたします。

「グラウンデッド・セオリーの構築：社会構成主義からの挑戦」講演会

日 時： 2009年3月14日(土) 15:00～16:30 (講演)
16:30～17:00 (質疑応答)
17:30～ (懇親会)

場 所： 青山学院大学青山キャンパス総研ビル

編集部より



第14号は年次大会特集号です。残念ながら参加できなかった会員の皆さまには、ぜひ大会の活気と熱気を紙面上で味わっていただきたいと思います。また、今回はじめての試みとして会員による著書を紹介させていただきました。研究や授業に役立てていただければ幸いです。いつものことながら、記事執筆に関しては、多くの方々からご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。

(NL 編集委員会メンバー：伊藤明美、生越秀子、大谷みどり)